

## 編集後記

『戦史研究年報』第18号をお届けします。

本号の特徴としては、第一次世界大戦勃発100年にちなみ、巻頭に関連論文を掲載するとともに、「史料紹介」では、第一次世界大戦に関連して青島要塞攻略に関する史料を掲載しています。

「論文」は、戦史研究センター所属研究者による平成25年度調査研究成果の中から2篇、投稿論文1篇を掲載しました。阿部論文は、第一次世界大戦における歩兵戦術の変化が日本陸軍に与えた影響を、日本陸軍の組織的な取り組みを通じて明らかにしようとしたものです。相澤論文は、海上自衛隊の「8艦8機体制」の策定経緯を再検討し、我が国海上防衛における意義等について考察したものです。小樫論文は、開戦劈頭におけるイスラエルの航空奇襲攻撃を最新の資料、特にエジプト側資料を駆使して最新像を明らかにし、作戦レベルの視点で航空作戦に関する新たな示唆を得ようとするものです。

「研究会記録」は、元米国陸軍統合軍事センターソ連軍事研究所長デヴィッド・M・グランツ氏の研究会の記録を掲載しました。第二次世界大戦におけるスターリンの戦略の重心が軍の撃滅から政治目標の追求へ変化していく過程を考察した論文で、独ソ戦から対日（満洲）侵攻作戦までを取り上げています。

「国際会議参加報告」は、ブルガリア共和国のヴァルナで開催されました第40回国際軍事史学会大会の概要及び同大会で石津国際紛争史研究室長が発表した論文（英語）を掲載いたしました。第一次世界大戦における日本海軍の地中海派遣について述べた論文です。

「活動報告」は、平成26年に戦史研究センターが実施した諸活動、史料閲覧室の閲覧状況などを掲載いたしました。

最後になりましたが、本号発刊のためにご協力いただきました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

(植松 孝司)